創価大学

Discover your potential
自分力の発見

図書館報

SEASON

2013 . 4　vol.21

ISSN 1349-3760

『アメリカン・ルネサンス文学の魅力』
浅山龍一附属図書館館長… 2
特集　中央図書館がリニューアル OPEN ！… 5

アメリカン・ルネサンス文学の魅力

―エマソン、ソロー、ホーソン、メルヴィルの人間讃歌―

浅山　龍一
創価大学附属図書館長

浅山 龍一（ あさやま　りゅういち）

1976 年　創価大学文学部英文学科卒業
1982 年　創価大学大学院文学研究科英文学専攻博士課程満期退学
1974 年～ 1975 年 米国 Gustavus Adolphus College 留学
1984 年　創価大学文学部英文学科就任
1998 年～ 1999 年　米国 San Diego State University Adjunct Professor

主要著書・論文
『英語コンサルタント』（南雲堂）『英文和訳の征服』（双文社）『英語の名ガイド』（興学社）『対訳フランダースの犬』（英語教育協会）その他、マーク・トウェインやアメリカン・ルネサンスに関する論文など。

アメリカン・ルネサンスはエマソンを中心とした１８５０年代前後のアメリカの大文学運動である。それは、エマソンの「神はすべての人の中にいる」（１８３３年９月３日の『日誌』）という大胆な着想に始まるといってよい。そして、その着想のきっかけとしてフランスの思想家ルソーがいたということは館報ＳＥＡＳＯＮ 第17号で述べた。

エマソンが学生時代よりどれほどルソーに惹かれていたかは当時の『日誌』を読めばわかる。「エマソンの成熟した文体はルソーに似ている」と彼の伝記を書いたリチャードソン（1）は言う。―そしてルソーは18世紀のフランスで、エマソンは19世紀のアメリカで、それぞれ形骸化したキリスト教会を否定し、人々に覚醒を促す。その結果、ルソーは教会と権力の迫害を受け、放浪の余生を送り、エマソンは牧師を辞め、講演会活動―何と、40年以上にわたり、１５００回の講演会である（2）―と文筆の人生を送る。

さて、ルソーとエマソンの思想上の違いは何だろうか。ルソーの『エミール』（１７６２年）とエマソンの『自然』

（１８３６年）を読んで比べてみる。

ルソーは、人間は自然・宇宙の中にある法則（＝神）とひとつになることによって幸福感を味わうと言う。自然は「厳しい教師」であり、ひとつとなるように人間を鍛えてくれる、と。そのためにも、人間は汚れた社会を捨て、童心に帰るべきだと訴えている。一方、エマソンは「すべての人の中に神は（すでに）いる」と言う。神が創ったこの世界の完璧さを信じ、自然界・宇宙の法則を感じとる者は「神」であると言い、「頭をさわやかな大気に洗われて、無限の空間に昂然ともたげれば・・・『普遍者』の流れが私の全身を走り、私は神の一部になる」「自然は（われわれが神になるように）奉仕するために作られている」と展開する。そして「それを理解できるのは人間だけである」とも。

ルソーは自然（の法則）中心主義、エマソンは人間中心主義といえないだろうか。ルソーはエリート主義（自然という厳しい教師についていける者だけが幸福になる）、エマソンは大衆主義（自分の中にいる神＝法則を感じとれば誰しも神である）ともいえる。エマソンは「私の中に、ムカデ、わに、鯉、鷲、狐がいると感じる」（『日誌』）とも言う。同じように「神」もいるわけだ。これは、仏教の「十界論」とよく似た発想である。神と仏を入れ替えればそっくりであり、最高の境地が身近に感じられる点でも大衆的である。

さらに、エマソンは心の中のものはすべて外界（自然界）に表れていると言う。たとえば、狐は人間の狡猾さを表し、岩は頑強さを表す。光と闇は知識と無知を表している、等々。そして、外界のものごとがすべて自分自身の実態と「照応」していることに気づいたとき、言い換えれば、外界の事象に自分自身を見出したとき、人間は爽快感を味わうと言う。心と外界が一体であることを説く仏教の「依正不二論」に近い考え方である。

では、エマソンとソローの違いは何だろうか。ソローの『森の生活』（１８５４年）を読んでみる。

ソローも、自然の中に深遠な法則―神―を見出す汎神論者であり、人間が神と等しくなれるという超絶主義者である。しかし、エマソン以上に動植物を観察し、その生態の魅力に惹かれる。野生の「凄まじさ」に圧倒され、野生の「智恵」に驚かされる。野生にもてあそばれる自分に気がつき、戸惑いを覚える。自分の中の「野生」「野蛮性」も認める。そして、自然から学んだ真理―自然・宇宙と人間の一体感―をもとに彼は行動を起こす。奴隷制を認める差別国家に税金を払わないという税金不払い運動と、奴隷制廃止運動である。

エマソンが哲学者であり、どちらかというと〝静〟の人なら、ソローは実験主義者であり社会改革者―〝動〟の人であろうか。ソロー思想はトルストイ、ガンディー、キング等の社会改革者たちに受け継がれる。

人間が神と等しくなれることを説く超絶主義に対し、キリスト教の罪悪論から逃れられない、むしろ罪に染まった自分の愚かさを認め、自分を弱き者として責め、神にすがることで救われようとするピューリタン信仰を描いたのがホーソンである。彼の『緋文字』（１８５０年）は出版されて即座に完売したという。人

間の弱さを見事に描いており、読んだ人々は自分たちの弱さを認め、同苦したわけである。と同時に、人々は作品に登場する、（たとえ罪を犯していても）社会の執拗なまでの責めに動じず堂々と生きている芯の強い女性とその娘の生き方―この少女は罪意識に囚われた大人たちを尻目に、ひとり自然と戯れ、自然に溶け込むほどに伸び伸びと生きている―に〝救い〟を見出したに違いない。ホーソンはこの作品に、エマソン的〝自己信頼〟の生き方（神が創ってくれた自分を信じて生きる生き方）を織り込んだのである。この作風はホーソンの他の作品にも見られるものである。

さらにメルヴィルがいる。『白鯨』（1851年）を読んでみよう。

主人公である捕鯨船船長エイハブは自分たちを支配しようとするすべての〝力〟―運命のようなもの―が許せない。アダム以来、全人類の行き場のない怒りと憎しみを駆り立ててきたものが許せないと言う。これは全てを創り支配してきた「神」のことか―。そして巨大な氷山のような白鯨を追いかけ続け、すべての恨みを込めて何度も戦いを挑む。（エイハブは昔この白鯨を攻撃したとき、片足を食いちぎられている。）数百ページにわたって、捕鯨の歴史や鯨の生態、鯨の商業価値、人類の古今の思想や哲学が紹介される中、白鯨が突如、その巨大な姿を現しては犠牲者を増やしていく。アメリカ人読者―そして私たちもいつしか手に汗を握りながら、白鯨を追いかけ、戦いを挑んでいる。エイハブとともに不条理な〝運命〟と戦っている。これはどういうことか！―私たちを創っておきながら苦しめている絶対者「神」と戦っているとは言えないだろうか。最後、当然のように、エイハブは敗れる。しかし、読者は爽快感を味わうのだ。圧倒的な力をもつ神と戦い抜いて敗れた爽快感。

『白鯨』は50年間理解されなかったという。しかし皆、なぜか、手に汗を握りながら読んだのだ。そして、後に、アメリカを代表する名作のひとつと認められるようになった。

紙幅の都合で、詩人ホイットマンについては論じられないが、『草の葉』（1855年）はエマソン、ソローの世界を詩で表現・展開したものと考えればよいかもしれない。

総じて、アメリカン・ルネサンスは人間を讃え、人間の自立を促す大文学運動であったのである。

エマソン著　酒本雅之訳
『エマソン論文集（上）』
岩波文庫

注

（1）Richardson Jr., Robert D.: *Emerson The Mind on Fire* (A Centennial Book, University of California Press, 1995) p.86

（2）ロナルド・ボスコ／ジョエル・マイアソン／池田大作『美しき生命　地球を生きる　哲人ソローとエマソンを語る』（毎日新聞社、2006年）p.213

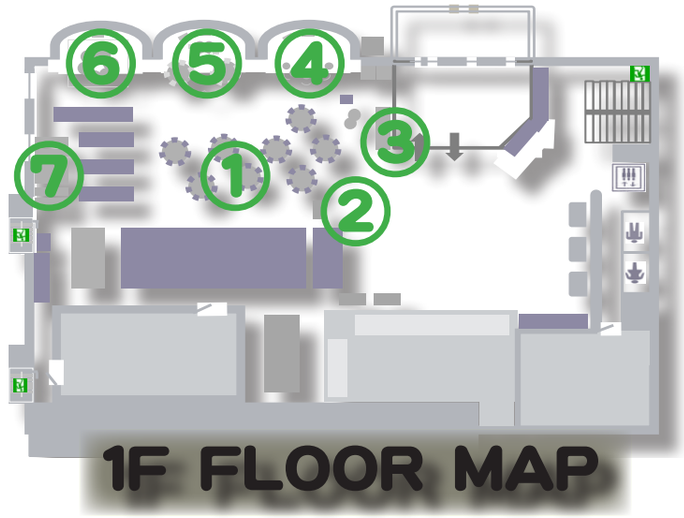
本文中、エマソンの『自然』の日本語訳は酒本雅之訳『エマソン論文集（上）』（岩波文庫、1973年）を参考にした。

2013年4月、中央図書館1階に「ラーニング・コモンズ」がオープンしました。

近年、学生の学習形態は、個人学習だけでなく複数で議論を交わしながら学習を進める「グループ学習」の形態が増えてきています。

中央図書館では、この学生の皆様のニーズにお応えするため、1階閲覧室にあった閲覧机や書架を「ラーニング・コモンズ」として全面的にリニューアルしました。

今号の特集では、リニューアルした箇所を中心に中央図書館の館内をご紹介します。



①

カラフルで開放的な空間に

今回のリニューアルで大幅に印象が変わった一階。男性の背丈よりも高かった書架から、胸元辺りまでの高さの白色のものに変更。オレンジ、赤、緑、青といったカラフルなイスも置かれ、全体的に明るいイメージの開放感あふれる空間に仕上がりました。様々な使用にアレンジできるユニークな機能をもった机も設置しています。

普段は天井に収納されている120センチスクリーンは図書館での各種の講義や催事に使われる予定です。

ディベート・ディスカッションの場を強化

ラーニング・コモンズとなった1階は、円卓を置いた中心部をはじめ、液晶テレビモニターやスクリーンを設置し、ノートパソコンの映像などを映し、ディスカッション等に活用することができるスポットを3か所設けました。各スポットに設置しているホワイトボードもディスカッションに効果的なアイテムとしてご活用いただけます。また、設置している机は、自由に組み合わせることが可能。人数や使用用途によって自由にレイアウトを変更して使うことができます。

こちらのスポットは事前予約はできません。ご利用になりたいときは、カウンターでお申し込みください。

1階以外もより便利に

今回の1階のリニューアルに伴い、2Fもレイアウトを変更。無線LANのエリアも拡大し、1・2・4階でも利用できるようになりました。3F閲覧室は今まで通り静寂ゾーンですので、ノートパソコンやタブレットPCのご利用はお控えください。

①ラーニング・コモンズ中央部

中央には8台の円形テーブルにオレンジの椅子を6脚設置。心落ち着くBGMも流れて、カフェのような開放的な雰囲気になりました。多人数で様々な資料を閲覧しながら学習を進めることができます。

②120インチスクリーン

普段は天井に収納されていますが、各イベントで利用される時は、迫力の大画面に触れてみてください。

③学習相談コーナー

CETLの大学院生が勉強の仕方やレポートの書き方など、総合的な学習の相談を受け付けます。気軽にご相談ください。

④ダイアログ・スポット

ゆったりと座ることのできる一人掛けのソファ・チェアを設置しています。取り出し式のテーブルを使って学習することができます。少人数向けスペース。

⑤ディベート・スポット

自由に組み合わせることのできる閲覧テーブルを設置しています。イスも多数用意しており、液晶モニタとホワイトボードも設置。大人数でのディベートに。

⑥ミーティング・スポット

こちらのテーブルは高さ調整もできるため、スタンドアップミーティングなど内容によって創造的に利用することができます。プロジェクタ、スクリーンも利用可能。フレームに設置しているロールカーテンを降ろして、より集中して学習に取り組むことができます。

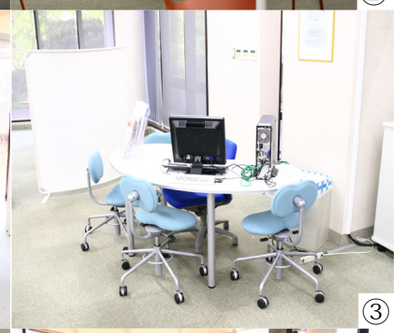
⑦ソファコーナー

ファミレスのようなソファとテーブルのセットが2組あります。ゆったりと学習したい方にお薦めです。

⑤

②

⑥


③

⑦

④

MYLIBRALY、検索システムもリニューアル

新しくなったMy Libraryでは、一目で貸出状況や予約状況の確認が行えるようになり、購入依頼などの利便性もアップしました。

図書の検索に使う検索システムも、検索語の設定や横断検索などを強化、さまざまな角度から検索を行えます。またデータがある物についてはamazonなどのページも同時に表示され、更に便利に使いやすくなりました。

今年もSBWが始まります

最後にSBWについてのお知らせです。

今年もSBW（soka book wave）が始まります。SBWは創価大学全学読書運動の略称で、創立者が提唱される「活字文化復興」を実現するため、「創価大学、創価女子短期大学から〝読書〟の波を起こそう」との学生の熱意で始まりました。SBWの参加対象は、創価大学の学部生と別科生、留学生、そして創価女子短期大学の学生です。

参加希望者は、SBWのWebサイトからエントリーを行ったのち、読書した図書の感想文やショートレビューを提出していただきます。

提出した感想文やレビューは、大学院生が確認し、間違った表現などがあれば、丁寧にアドバイスをします。そして、大学院生の確認・承認が終了すると、1件につき1ポイントが付与され、5ポイント毎に図書カードを1枚進呈します。承認された感想文は、SBWのWebサイトなどで公開します。

SBWを活用して、皆さんで創価大学に読書の伝統を築いていきましょう！

1階は学習の為のスペースですので、友人との雑談や飲食、携帯電話での通話はブラウジングルームでお願いします。

ホワイトボードや長机も設置してあるので、飲食しながらのグループ学習もできます。

創価大学 附属図書館
〒192-8577　東京都八王子市丹木町 1-236
Tel : 042-691-3191　Fax : 042-691-9308
http://lib.soka.ac.jp